

ショパンコンクール 2025 第3ステージ 鑑賞ノート

全体の印象

第3ステージは、単なる技術の集大成ではなく、『音楽と人間の関係』そのものを問う場となったと感じた。各ピアニストの演奏には、「誰が音を支配しているのか」——すなわち司令塔がどこにあるのかという違いが表れていると感じ取った。その差が個性となり、音楽の“哲学”の違いとして現れているように思う。

ピアニスト別の印象まとめ

ピアニスト	印象的だった演奏曲	特徴的印象	キーワード
SHIORI KUWAHARA (日本)	ソナタ第3番、マズルカ	2ndでは「大舟の操縦士」。3rdでは何を操縦するのか。音に無理がなく、聴く者を安心させる包容力。	落ち着き・調和・成熟
MIYU SHINDO (日本)	ソナタ第2番、アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ	音楽と肉体が完全に同化。感情の奔流がそのまま音になる。	肉体・本能・生命
ZITONG WANG (中国)	ソナタ第2番、ワルツ第15番 (WN18)、スケルツォ第1番	精密で清らかな音。鍛え上げられた肉体の支えが繊細な音色を生む。	精緻・透徹・成長
KEVIN CHEN (カナダ)	ソナタ第3番、バラード第4番	精神の嵐がそのまま音に変わる。燃焼型の演奏。	精神・嵐・燃焼

演奏ごとの感想

KUWAHARA SHIORI

▶ SHIORI KUWAHARA – third round (19th Chopin Competition, Warsaw)

- ソナタ第3番 **Op.58**: Steinwayの響きを最大限に生かしながらも、どこまでも安定した操縦。安定感に包まれる。聴いていると、包まれるような幸福感が生まれる。
- マズルカ **Op. 33**: 日本人にとって自然に響くマズルカ。耳に心地よい柔らかさが特徴。

SHINDO MIYU

▶ MIYU SHINDO – third round (19th Chopin Competition, Warsaw)

- ソナタ第2番 (葬送) **Op.35**: 2楽章の躍動と3楽章の静寂が共存。理性を超え、死を“生命の一部”として描くような深さ。
- アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ **Op.22**: 静謐さから情熱への変化が見事。ピアノと彼女が完全にコネクト。曲が彼女を弾かせている。ピアノと彼女の境界が消え、魂のダンスのよう。彼女の魅力を語るなら、まずこの演奏を紹介したい。

ZITONG WANG

📺 ZITONG WANG – third round (19th Chopin Competition, Warsaw)

- ソナタ第2番(葬送) **Op.35**: 凜とした葬送。音の粒一つひとつに理性の緊張が宿る。正確で揺るぎない。静かな威厳を感じる。
- ワルツ第15番 (**WN18**): 小品ながら選曲のセンスが光る。
- スケルツォ第1番 **Op.20**: これまでのステージを総括するような集中力と気迫。聴く者の心を締めくくる“終章”として完璧。

KEVIN CHEN

📺 KEVIN CHEN – third round (19th Chopin Competition, Warsaw)

- バラード第4番 **Op. 52**: まさに全身全霊の演奏。感情ではなく魂が鍵盤を打つよう。聴く者を巻き込み、空間全体を震わせる。激しい呼吸とともに、ピアノが燃焼していく。
- ソナタ第3番 **Op.58**: 精神と肉体の極限。汗を落としながらの、精神の嵐そのもの。

気づき(成長・変化・共鳴)

ソナタなどの大曲を精神の流れで聴くことができた。

また、各奏者の“司令塔”がどこにあるのかを次のように感じ取った。それは単に弾き方の差ではなく、音楽をどのように捉え、どこから生み出しているかという“構造”の違いではないかと思う。

私の感じとった、各奏者の「司令塔」の位置とピアノとの関係

ピアニスト	司令塔の位置	ピアノとの関係	音楽の本質
Shiori Kuwahara	脳(理性)と身体の中心軸	奏者 → ピアノ(操縦)	Architecture : 音楽を構築する理性。全体を俯瞰しながら響きを精密に設計する。
Zitong Wang	指先(感覚神経)	指先 ↔ ピアノ(感覚)	Synesthesia : 感覚による融合。音と神経が直接つながるような、純粋で透明な演奏。
Miyu Shindo	ピアノ内部(共鳴板)	ピアノ → 奏者(一体)	Incarnation : 身体による共鳴。ピアノと一体化し、肉体が音楽の通路となる。
Kevin Chen	心(精神の中心)	心 → 奏者 → ピアノ	Transcendence : 精神による投射。心が身体を動かし、音楽そのものを存在させる。

番外編: ポーランドのピアニストの演奏

鑑賞が日本人、東洋人に偏っているので、本場ポーランド人の演奏を聴きたくなった。ただし前のステージから全曲聴く時間的余裕もポーランドの音楽感性をどこまで理解できるか不明なため「番外編」扱いとしてここに記す。

PIOTR ALEXEWICZ

PIOTR ALEXEWICZ – third round (19th Chopin Competition, Warsaw)

土地と文化に根ざした自然体の演奏で、音楽の“源流”を体現しているように感じた。

Shigeru Kawai を選んでいるのが象徴的。スタインウェイよりも柔らかく、音の立ち上がりが優しいピアノだから、その「自然体の美学」にぴったり合う。まるで、ポーランドの大地と日本の職人技が静かに握手しているような光景ではないか。

- マズルカ **Op.41**:やはり日本人のマズルカとは、体の揺らし方からして違う。しかし呼吸のように自然。文化の根源としてのマズルカ。
- アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ **Op.22**:無理のない自然体の演奏。

番外編:「ショパンを弾く」立ち位置

よく言われる「ショパンを弾く」「ショパンらしく弾く」とはなにかという問いに対して思うところ。

Piotr ALEXEWICZの演奏を聞いて、彼のようなポーランド人の演奏を“源流”として捉えたとき、遠く異国のピアニストたちに受け継がれた遺伝子の構造を感じた。つまり

- 音楽的重心の安定感 → KUWAHARA
- 音色のタッチと繊細な指先 → WANG
- 音楽に乗る喜びと表情 → ONODA
- 精神と魂 → CHEN
- 音楽そのもの → SHINDO

すなわち「ショパンを弾く」といっても立ち位置によって次のような別の特徴を示すことになるのではないかと思う。

立ち位置	ピアニスト	特徴
源流・大地	Piotr ALEXEWICZ (ポーランド)	土地と文化に根差した“自然体のショパン”
精神・魂	Kevin CHEN (カナダ)	形を超えて精神で弾く“燃烧型”ショパン
安定・包容	SHIORI KUWAHARA (日本)	精緻な安定感と深い包容力、“大舟の操縦士”
感性・本能	MIYU SHINDO (日本)	音楽と一体化する、肉体が奏でるショパン

透明・繊細

ZITONG WANG(中国)

音色美と構築力の融合、清らかで気品あるショパン

今後の展望

ファイナルでは、音楽と人間の統合がどのように表現されるかに注目したい。ALEXEWICZの“源流”、KUWAHARAの“安定”、SHINDOの“生命”、WANGの“透明”、CHENの“精神”。これらが最終的にどのように結実し、どんな答えを示すのか。